

お賽銭で…今夜は焼き肉ねっ！

作・演出 藤谷清六

横山百江



山本将広

ひゆか

「あたしかて、なにも好きこのんで女郎になったわけやない。同じ女に生まれて、なんで好きな男と夫婦になられへんのんか……それはなんや？それはなんや！」
めおと



土井 マチ子



樋貝 孝弘



きむち



望月タダシ



小池 武



鶴岡 はるか



萩原 京子



高畠 美登里



西木 愛



小松 正彦

ブラボー「お賽銭で…今夜は焼き肉ねっ！」



「奈麻余美文庫」
植松 光宏

舞台幕開け 下手は近松の世界、旅芸人の治兵衛は紙屋の亭主、曾根崎の小春と云う女郎とねんごろ、女房のおさんは、小春に手紙を出す。物語はここから進展……。舞台上手 現代社会どこにでもある庶民生活を写します。八百屋の女将が近隣の口ゼッタの大将、ハンバーガー屋の亭主らと口論、それにレズビアンの女二人が加わり、世論を批判、大学教授磯崎先生が加わり口角泡を飛ばし、議論、主義主張、やがて、老俳優が出番、上手、下手が交差し芝居は渾然一体となり、道筋をたてて之を治める。先ずは目でたし、目でたし。

魅惑的なタイトル「お賽銭で…今夜は焼き肉ねっ！」私はこのタイトルに不審を思い続けた。問題解決は舞台最後の最後、轟唾のあやめちゃんの一言「お賽銭で…今夜が焼き肉ねっ！」「あっ、喋った」全員で「あやめちゃんが喋った！」なんと、まあ、ファンタジックな作品よ！溜飲が降りた。作・演出の藤谷清六、素晴らしい台本に向かってブラボーを送った。役者陣には当日もう一度ブラボーを送ろう。私は劇団コメディ・オブ・イエスタディに在籍中、二度藤谷氏と共に演じたことがある。交遊はその時以来15年に及ぶ、演劇に対する情熱は人一倍、飲食、交遊も並はずれて化けものと思っている。奈麻余美文庫には「藤谷清六コーナー」がある。彼の著作の全て、視聴覚記録は奈麻余美文庫のお宝であり、山梨の演劇史の1ページを飾っている。

清六さんは、ボクより元気だ。

定年を迎えて、元気のないボクは、清六さんとお話ししてもらうたびに、勇気づけられる。数年先輩の彼のほうが僕よりずっと元気だ。構想中の複数の芝居の話をするときの、生き生きしていること。最近は暇だ、足も心配だ、なんて言いながら、明日はゴルフ、明後日は東京に芝居だ、なんておっしゃる。ピエロの役、やってよ、とかボクを口説くことも忘れない。今回、また出演を断って、ごめんなさい。でも清六さんとの親交は、ボクにはありがたい。年を重ねれば重ねるほど、先輩のロールモデルが必要だと痛感してるけど、清六さんこそ、僕のロールモデル、つまり手本となる高齢者（失礼！）だ。失礼ついでに言わせてもらうと、今までにも増して元気旺盛な清六さんの生き方を見ていると、亡き奥様の分も一緒に生きているのではと思う時がある。小春と治兵衛のセリフを読んでいて、そう直感した。

なにはともあれ、『翔べない二人』再演に続いて、目新しい新作を世に問う清六さんの意欲に、敬意を表します！



山梨英和大学
川口 清泰

作・演出 藤谷 清六

この「お賽銭で…今夜は焼き肉ねっ！」というお芝居は、旅芸人たちが一生懸命演じているにも関わらず、全く興味を持たずに無視する市井の人々の日常の姿と、社会生活からドロップアウトした旅役者たちとの対比を現したもの。観客数を少しでも増やしたいという（演劇を職業としていない私たちの）切なる願いを込めて書きました。ぜひ、甲府桜座へお越し下さい。

劇中で旅芸人たちが演ずる近松門左衛門作「心中天網島」は享保5年（1720）に大阪の竹本座で上演されました。この心中は大阪曾根崎の遊女小春と、天満御前町の紙屋治兵衛とが「網島の大長寺」で心中した事件を題材として書かれたものです。近松は歌舞伎と淨瑠璃の作者として活躍しましたが、特に竹本義太夫が大阪で人形芝居の竹本座を起こすと、もっぱら竹本座のために「曾根崎心中・冥途の飛脚」など多くの淨瑠璃作品を執筆しました。（参考文献・諏訪春雄 訳 心中天網島より）